

妹がたもとを 露霜の 置きてし来れば この道の 八十くま毎に  
万たび 顧みすれど いや遠に 里さかり来ぬ いや高に 山も越  
え来ぬ はしきやし 我が妻の子が 夏草の 思ひしなひて 嘆く  
らむ 角の里見む なびけこの山

大意 138この歌は(131)の歌と本来は全く同じ歌が、二三の句の転訛と、数句の増補を見て居るに過ぎない。用字には異同が目につくがそのことは今取り立てて言はない。釈義も131をよく読むことによって自ら諒解されることと思われる。

反歌一首

139 石見の海うつたの山の木の間に我が振る袖を妹見つらむか

右歌体雖同句々相替。因此重載。

大意 (一三二)及び(一三四)のもう一つの別伝である。

139 石見の海うつたの山の木の間に、我が振る袖を妹(妻)は見たであらうか。

柿本朝臣人磨妻依羅娘与人磨相别歌一首

140 な思ひと君言へどもあはむ時いつと知りてか吾が恋ひざらむ

大意 物思いするなど君は言われるけれども、再び会う時をいつとも知れないので、どうして恋しく思わないでいられますよう。

167 天地の 初の時 ひさかたの 天の河原に やほよろず ちよろず  
人磨が作った歌一首と短歌

反歌二首

168 久方の天見る如くあふぎ見しみ子のみ門の荒れまく惜しも

大意 ヒサカタノ天を見るように、仰いで見ていた日並皇子の宮の荒れるのは惜しい。

169 あかねさす日は照らせれどぬばたまの夜渡る月のかくらく惜しも

大意 アカネサス日は照らしているけれども、ヌバタマの夜行く月の隠れるのは惜しい。

(或る本では、この歌を後の皇子の尊(高内皇子)の殯宮の時の反歌としている。)

194 柿本朝臣人磨が初瀬部皇女と忍坂部皇子に献上した歌一首と短歌

飛ぶ鳥の 明日香の川の 上つ瀬に 生ふる玉藻 下つ瀬に 流れ  
触らふ 玉藻なす か寄りかく寄り なびかひし つまの命の た  
たなづく にぎはだすらも 剣刀 身にそへ寝ねば ぬばたまの  
夜床も荒るらむあねなむ そこゆゑに 慰めかねて けだしとも  
逢ふやと思ひてもあへやと 玉垂の 越智の大野の 朝露に 玉藻  
はひづち 夕霧に 衣はぬれて 草枕 旅かもする 会はぬ君ゆゑ

大意 トブトリの明日川の上の瀬に生えている玉藻は、下の瀬に流れて触れ合う。その玉藻のように、さまざまになびき寄り合った夫君の、タタナヅクゆたかな膚さえを、ツルギタチ身に添えて寝ないから、ヌバタマの夜の床も荒れることであろう。そのために心を慰めかねて、あるいは会うこともあるかと思つて、タマダレの越智の大野の、朝の露に玉藻はよこれ、夕べの霧に衣はぬれて、クサマクラ旅宿りをするのであ

神の 神つどひ つどひいまして 神あがち あがちし時に 天照  
らす ひるめのみこと(一)に云ふ 八重雲わきて 神くだし いませまつりし  
たかてらす 日のみ子は あすかの きよみの宮に 神ながら ぶ  
としまして すめろぎの しきます国と 天の原 いは戸を開き  
神あがり あがりいましぬ(一)に云ふ 神のほり わが大君 み子のみ  
ことの 天の下 知らしめしせば 春花の たふとからむと 望月  
の たたはしけむと 天の下(一)に云ふ よもの人の 大船の 思ひ  
たのみて 天つ水 仰ぎて待つに いかさまに 思ほしめせか つ  
れもなき 真弓の岡に 宮柱 ふとしきまし みあらかを 高知り  
まして あさ言にみ言問はさず 日月の まねくなりぬる そこゆ  
ゑに み子の宮人 行くへ知らずも(一)に云ふ けくへ知らにす(み子の)

大意 天地の初めの時、天の川原に、やおよろずちよろずの神々が集まって、天地の支配を分けた時に、天照日女の神に天を治めよと定め、地である瑞穂の国をば、天地のあらん限り、治められる神として、天の雲の重なっているのをかき分けて下された日の御子天武天皇は、飛鳥の浄御原の宮に、神として都を立てておられたが、天皇のおられる国はこの国ではなく天上であるとして、天の石の門を開いて天上に上って行かれてしまった。そこでわが大君である日並皇子が天下を治められたなら、春の花のように、貴くあろう、望月のように、欠けたこともなからうと、四方の人々の信頼し濁仰して待っているのに、どのようにお思いなされたことか、ゆかりもない真弓の丘に、宮柱を太く御殿をお立てにお立になって、朝々のお言葉も仰せられず、既に数日数月立ってしまった。そのために日並皇子の宮に仕えていた人々は、行くべき方も分からずにいる。

ろうか。その会わない夫君のために。

反歌一首

195 しまたへの袖交へし君だれの越智野に過ぎぬまたも会はめやも

越智野に過ぎぬ。

大意 袖を敷き交わした愛しき君は、越智の野に於いて亡き人となられてしまった。また会えようか

天明一寛政年間一般的な津軽の農民の野良姿

野良用の上着に、藍で染めたモンペを着ける。そして素足にワラジをはき、また蒲の葉を編んで作ったはぎつまり脚絆をつける。ふつう着るものは一応これでよいわけだが、この上にケラ衰を着るばあいがある。これは雨をしのぐためか、あるいは背当をして荷物などを背負うばあいに着る。

頭には、イグサで編んだ網笠をかむる。この笠は登具麻武保宇という、十府というところの産で、漏る帽子という意味であろうという。次い持物であるが、小ダシという藁縄で編んで作った手提袋を



もつ。これは昼の弁当やこまかな身廻り品、時には焼飯なども入れたという。この小ダシは一尺四方ぐらいのもので、物を少しずつ入れるのでこの名がついたという。このほかに、鎌が一丁あり右の腰にさし込んである(奥民図案より)

◆ 編集あとがき ◆

編集をまかせられてから本にまとめるまで長い月日がかかったが、ようやく発行の運びとなった。原稿締切日を二度延ばすなど紆余曲折(うよきよくせつ)はあったが、前編集長の協力に負うところが大きい。嘉瀬の村の古い歴史を掘り起すべき事がまだまだ多いのにもかかわらず、記録にまとめる努力が今ひとつ足りないように感じられる。ふるさとを探る会も昭和五十二年四月に発足して以来十年近くなる。この辺で原点に戻って調査、研究に重点を置くべきではないかと思う。表紙裏の「八幡宮鳥居の鬼コ」については、珍しいものだと思いきり上げたが、鎌田稲辰氏の引き合せて、津軽の神社鳥居の鬼コを調査研究している弘前市の加藤慶司氏の調査記録を見せてもらった。加藤氏が調査記録したものが三十二カ所、そのうち金木町には、嘉瀬八幡宮、中柏木磯崎神社、小栗崎稲荷神社、喜良市立野神社、喜良市熊野宮、川倉三桂神社と六カ所もあった。加藤氏は神社鳥居の鬼コの調査だけに八年間取り組んできたという。われわれの調査の底の浅さが痛感させられた。そして広域的な調査もこれからはもっと積極的に進めるべきだと思う。会員諸君の奮起を望むとともに、各位のご指導をお願いして、編集のあとがきとします。

(山 中正 津)

会 員 名 簿

編集局長	山 中 正 津	"	沢 田 勝 衛	秋 元 清 逸	木 下 巽	沢 田 国 美	秋 元 惣 之 進	原 田 正 信	沢 田 薫	山 中 長 三 郎	沢 田 政 孝	須 崎 正 敏	小 山 内 嘉 一 郎	木 下 俊 三	秋 元 幸 之 進	沢 田 由 男	伊 藤 定 四 郎	鳴 海 勲	外 崎 三 千 男	会 員	木 立 久 二	木 下 清 一	副 会 長	原 田 万 治	会 長	木 村 治 利
------	---------	---	---------	---------	-------	---------	-----------	---------	-------	-----------	---------	---------	-------------	---------	-----------	---------	-----------	-------	-----------	-----	---------	---------	-------	---------	-----	---------

貯金・共済・米・肥料は農協へ……

嘉瀬農業協同組合

金木町大字嘉瀬字雲名町ノ一八ノ一  
電話 (代) 五三一—二〇六七  
組合長理事 吉崎 忠道  
専務理事 木村 金利  
参事 鳴海 俊三  
外役職員一同

札幌ラーメン・味の札幌分店

白川食堂

金木町嘉瀬駅前  
電話 五二—二四五〇

金木名物・甘露梅

沢金菓子舗

金木町嘉瀬駅前  
電話 五二—二八〇五

阿部齒科院

院長 阿部 寿

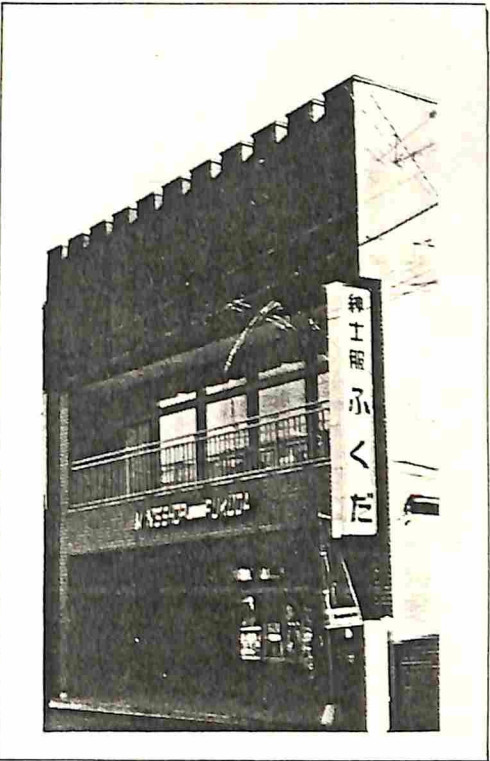


五所川原市敷島町六四ノ二  
電話 三五—一五四四

TOTAL FASHIN  
紳士服の名門  
**ふくだ**  
北津軽郡金木町米町  
TEL 52-2552  
社長 福田元信

■金木本店 ■五所川原店  
■弘前店 ■黒石横町店

■北津軽郡金木町米町 電話(01735)22552 ■五所川原市敷島町63番 電話(0173)26657  
■弘前市代官町38番 電話(0172)55217 ■黒石市横町8番 電話(01725)35285



スナツク

彩月

金木町朝日町  
電話(昼)五二一二七五七番  
(夜)五三一二九三一番



株式 **博** 会社

**藤博材木店**

東京都品川区戸越5丁目14番17号  
(第二京浜国道)  
電話 (781)1292・(782)0216  
代表取締役 湯本正美

かたりべ第五集

発行 昭和六十一年二月十五日  
発行所 嘉瀬ふるさとを探る会  
発行者 木村治利  
編集人 山中正津  
印刷所 八戸市小中野四丁目三ノ四五  
有限会社 八戸プリント



伊藤忠吉記念図書館



1080034313